九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ドイツ・アメリカ医学の特徴について

井口, 潔
九州大学 : 名誉教授

https://hdl.handle.net/2324/1854783

出版情報：『医学のうねり』セミナー : 西欧医学での医学教育・医療. 第5回, pp.1-, 2017-10-14. 九州大学医学歴史館
バージョン：
権利関係：

第５回歴史のうねりセミナー（２０１７/10/14）

九大名誉教授　井口潔

ドイツ医学について

17 世紀に発芽したオランダの Boerhaave の**病床医学**は 18 世紀にはエディンバラ学派の「**病院医学**」として開花し、フランス学派、ウイーン学派、アメリカ学派を生んだが、ドイツだけはこの病院医学から離れて 19 世紀に**「研究室医学」**を興すこととなった。

１．ヨーロッパ諸国の特色ある医学の進歩の姿

西ヨーロッパにおける近代西洋医学は、国によって特色ある進歩をとげた。

《イギリス》

病院医学の Boerhaave の病床医学をその正統派として継承して開花させたのはイギリスのエディンバラ学派だった。

《フランス》

フランス革命でパリの医療機関の機能が一時停止した非常事態において、パリ市内の建物は緊急避難的に撤収されて、「健康学校」を呼ばれる医学校がつくられ、ノートルダム寺院の施療所は「オテル・デュー」として病院に転用されるなどして近代フランス医学がつくられた。革命後の啓蒙主義の緊迫感が肌で感じられる（小林晶先生が詳述）。

２．研究室医学を起こしたドイツ医学

ドイツ医学の発祥はイギリス・フランス医学とは異なった状況のなかでおこった。当時のドイツはフランスとは対照的のロマン主義がみなぎっており、それが近代医学を阻害するような風潮にあった。その一つが Samuel Hahnemann(1755－1843、現在のハーネマン医科大学の始祖）のホメオパチーと呼ばれた治療法だった。彼はキニーネの作用を調べているうちに、これがマラリア類似の症状を普通人にも起こすことを知り、ある発想を持つに至った。それはある病気を治すには、その症状に似た薬を探して、その微量を長期にわたって飲ませるというもので、似たものを治すという意味で《ホメオパシー（homeopathy）》と呼ばれた。

また骨相学の元祖 Franz-Joseph Gall も存在した。

これらの非科学的雰囲気を放置すれば、ドイツは近代医学に後れを取ってしまうとの危機感が基礎医学者の中から起こり、19 世紀半ばごろに「研究室医学」を立ち上げる新風が起った。

その主役を演じた碩学を挙げると次のようである。

＊Johannes Muller(1801-1858):解剖学、生理学、病理学全般
＊Theodor Schwann(1810-1882):細胞学
＊Jacob Henle(1809-1885) :組織学 (顕微鏡解剖学)
＊Emil du bois Reymond(1818-1896):フランス系ドイツ生まれ。電気生理学
＊Hermann von Helmholtz (1821-1894) : ハイデルベルク大の生理学教授から
ベルリン大学物理学教授
＊Rudorf Virchow(1821-1902) : 歴史的大著「細胞病理学」を 1858 年、「病的腫瘍論」を 1863-68 年に著す。

これらの碩学はそれまでの概念的疾病観から脱却して、解剖・生理・病理学等からの学問的位置づけを明確にしたことに特色がある。

3. 病院医学と研究室医学をとりいれた《アメリカ医学》

アメリカ医学の初期に活躍した医学者のほとんどはエディンバラ大学に留学したが、その一人の John Morgan(1735-1789)はアメリカに帰国して 1765 年にフイラデルフィア医学校を創った。
19 世紀に入ると WilliamThomas Morton によるエーテル麻酔法の発見（1846）、E.McDowell による世界最初の卵巣摘出術などアメリカ独自の業績が出始めた。
しかし 19 世紀後半になると南北戦争後の社会秩序の荒廃、アメリカの活力が急速に東海岸から西海岸へ移動することによっておこる医療制度の深刻な空白化を自浄するために 1947 年にアメリカ医学協会が設立された。
一方、西ヨーロッパで開花した病院医学には一応限界が見えたと判断した意欲ある医学研究者は第 2 陣としてドイツに留学して研究室医学を研鑽して帰国, 研究室究室医学の拠点として Johns-Hopkins 大学をつくった。アメリカは一国で病院医学と研究室医学の両方のメッカを創った。
《国別にみた近代医学の開拓者一覧》付表を見ると、ドイツ学派は研究室医学、他の国は病院医学、アメリカは両者が折衷している。

４．ドイツ医学を選んだ日本

明治時代になり、政府は医学教育御用掛に佐賀藩士の相良治安と福井藩の岩佐純を任命して、日本の医学の指導を託する国の選定を命じた。一方、明治政府樹立の最後の闘いの戊辰戦争の負傷者の治療に抜群の功績を立てたイギリス公使館付き武官の William Willis を高く評価して、イギリス医学を導入する空気が

強いことに反発した相良は開成学校教頭の G.F.Verbeck に意見を求めてドイツ医学を推薦して、大隈重信、副島種臣らを動かしてドイツ医学導入を決定した。
このために日本医学はドイツ学派の研究室医学から出発することなり、医学を志す俊秀はこぞってドイツに留学して研究室医学を学んだ．エディンバラ大学に留学して慈恵医大を創設し、海軍軍医総監となった高木兼寛だけがイギリスの
病院医学を修めた。明治の軍陣衛生の大きな問題の脚気の病因について、主食白米とする陸軍はドイツ医学を信奉する森林太郎（鴎外）と、麦米・パン食を摂らせるべきとする海軍の高木兼寛の学術論争となり、軍配は高木に上がるというエピソードがあった。
日本はドイツから研究室医学を学んだので、大学各教室に入局した者は研究態度において秋霜烈日の修練を受けた。教室員は症例報告をドイツ語で書くように指導され、それによって世界の文献を身につける訓練を受けた。医学用語はドイツ語だった。病理解剖の執刀者はドイツ語で所見を述べ、Beschreiber(筆記者)はそれを記録した。旧制高校でドイツ語教育を受けていたのでそれができた。